

Title	第二言語習得における着点への到達の有無と移動表現：日本語・ハンガリー語の双方向的比較
Author(s)	江口, 清子
Citation	ハンガリー研究. 1 p.131-p.168
Issue Date	2021-03-31
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/81533">https://doi.org/10.18910/81533</a>
rights	
Note	ISSN: 2436-1364 (print), 2436-4932 (online)

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 第二言語習得における着点への到達の有無と移動表現：日本語・ハンガリー語の双方向的比較\*

江口清子

### 1. はじめに

日本語とハンガリー語では、人や物の移動を表現する方法が異なることが知られている。日本語では、(1a) で示すように、移動の経路、つまり、洞窟の内側から外側への移動は「出る」という動詞と「から」という後置詞によって表される。それに対しハンガリー語では、(1b) で示すように、*ki-* (out) という動詞接頭辞と *-ból* (from.in) という格接辞で表される。

(1) a. ボトルが プカプカと 浮かびながら 洞窟から 出た。

b. A        *palack ki-sodród-ott*        a        *barlang-ból*.

the       bottle out-float-PST.3SG       the       cave-DEL<sup>1</sup>

「ボトルが洞窟から浮かび出た。」

このような違いのある言語を第二言語 (L2) として学ぶ場合、学習者は、人や物の移動をどのように表現するのだろうか。一般に、学習者の言語表現には、誤用を含む、母語 (L1) 話者とは異なる表現が多く見られるが、具体的にはどのような違いがあるのだろうか<sup>2</sup>。本研究では、日本語、ハンガリー語という2つの学習者言語を対象に、移動表現の中でも、描写する移動事象が着点への到達を含むか含まないかによって、言語表現にどのような差異が生じるのかに着目し、考察を行う。

移動事象が着点への到達を含むか含まないかというのを図で示すと以下のような違いである。図1も図2も映像から切り出した写真である。着点への到達を含む事象を映し出す図1の元となる映像では、女

の人が自転車のところに行ってそこで止まっている。それに対し、着点への到達を含まない事象を映し出す図 2 の元となる映像は、最後、女の人が歩き続ける途中で終わっている。

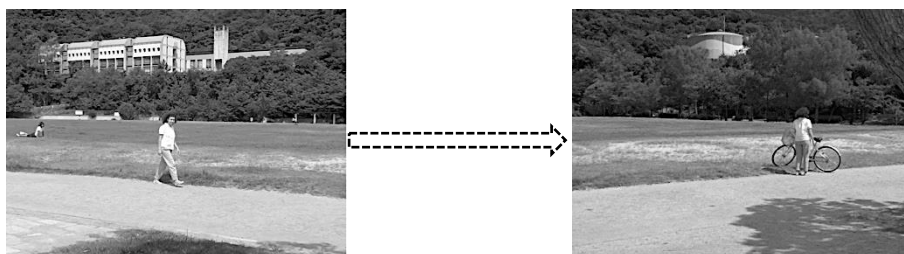


図 1. 着点への到着を含む移動事象

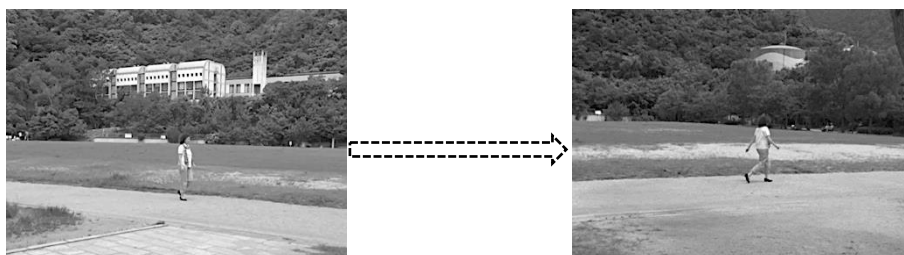


図 2. 着点への到着を含まない移動事象

ハンガリー語には動詞接頭辞と呼ばれる文法カテゴリーが存在し、(1b) で示したように、移動の経路の表出に関わるが、経路だけでなく、事象のアスペクトの表出にも関わることが先行研究で多く指摘されている (Kiefer 1996, 2000; É. Kiss 2002 など)。つまり、表現される事象が非終結的 (atelic) である場合には動詞接頭辞をともなう表現は用いられない (江口 2017: 62-63)。このため、例えば図 1 のような、着点への到達を含む事象であれば、(2a) のように動詞接頭辞をともなう表現されるが、図 2 の着点への到達を含まない事象であれば、(2b) のように動詞接頭辞をともなわずに表現される。

- (2) a. *Erika oda-sétál a bicikli-hez.*  
 Erica to.there-walk.3SG the bicycle-ALL  
 「(lit.) エリカがあそこに自転車のところに行った。」

b. *Erika a pályá-n sétál.*

Erica the field-SUP walk.3SG

「エリカがフィールドを歩いている。」

一方、日本語にはこのような文法カテゴリーは存在せず、先行研究における調査から、(3a,b) で示すように、両者に違いは見られないことが明らかにされている（江口・吉成・眞野・ボルジロフスカヤ・松本 2017）。

(3) a. 友達が自転車のところに歩いていった。

b. 友達が道を歩いていった。

このように、両言語間には類型の差だけでなく、着点への到達を含む事象と含まない事象とを表現し分けるか表現し分けないかという差もある。両者を表現し分けない言語（日本語）を母語とする者が、両者を表現し分ける言語（ハンガリー語）を学習する際には難しさが生じることが予測される。逆に両者を表現し分ける言語（ハンガリー語）を母語とする者が、両者を表現し分けない言語（日本語）を学習する際にはどのような影響が見られるのかも興味深い研究課題である。

そこで本研究では、このような差異について、日本語を母語とするハンガリー語学習者と、ハンガリー語を母語とする日本語学習者という 2 つの学習者言語を対象とし、考察を行う。考察の過程で、それぞれの目標言語および母語とも比較・検討することで、両学習言語の特徴を明らかにする。

本稿の構成は以下のとおりである。第 2 節ではまず、移動表現の言語類型について概説し、日本語およびハンガリー語の移動表現の特徴をまとめる。第 3 節では本研究で行った調査方法について記述し、第 4 節で調査の結果をまとめつつ、比較・検討を行い、第 5 章で総合的考察を行う。

## 2. 移動表現の言語類型と日本語およびハンガリー語の特徴

## 2.1 移動表現の言語類型

移動事象には移動物 (Figure)、参照物 (Ground)、経路 (Path)、様態 (Manner) などの意味概念が含まれる。例えば、(3a) の「エリカが走って部屋に入った」という事象であれば、移動物は「エリカ」、参照物は「部屋」、経路は〈入る〉という概念、つまり（部屋の外側から）内側への移動、様態は〈走る〉という移動の方法を指す。これらの概念をどの言語形式で表すのかは言語によって異なるため、従来、さまざまな言語類型が提唱されてきた。その中でもとりわけ重要なのは Talmy による経路の類型論 (Talmy 1985, 1991, 2000) である。そこでは移動の経路に着目し、経路概念を文の中核を担う動詞で表す言語と、動詞以外の要素で表す言語とで世界の諸言語を二分している。例えば、英語では (4a) の *out* のように、移動の経路を不変化詞で表すのに対し、スペイン語では (4b) の *salió* ‘exited’ のように、移動の経路を主動詞で表す傾向がある。

(4) a. *The bottle floated out (of the cave).* (Talmy 1991: 487)

b. *La botella salió flotando de la cueva.*

the bottle exited floating from the cave

「ボトルが洞窟から浮かびながら出た。」

英語型の言語では、一般に、主動詞で様態が表される。それに対し、主動詞で経路が表されるスペイン語型の言語では、様態は動詞の分詞形などで表される。Talmy はこのスペイン語のように経路を動詞で表す言語を「動詞枠付言語 (Verb-framed language)」、英語のように、経路を動詞以外の要素で表す言語「付随要素枠付け言語 (Satellite-framed language)」と呼んでおり、Talmy に続く研究でも「V 言語 (V-language)」

「S 言語 (S-language)」という用語がよく知られている。しかしこの用語は、2つの点で誤解を招くものだと Matsumoto (2003 [2011]) は指摘している。1つは、Talmy が指す「動詞」とは、品詞としての動詞ではなく、文の主要部としての動詞 (= 主動詞) である、という点である。(4b)

では「出る」を表す動詞 *salió* が主動詞として使われるほかに、「浮かぶ」を表す動詞が *flotando* という分詞形で用いられるが、Talmy が問題にしているのは主動詞である。もう 1 つは「枠付け」という概念である。Talmy は、移動事象の時間的枠組みを決めているのは経路の特性であり、それゆえ経路が移動事象を枠付けしている (Talmy 2000) としているが、松本 (2017a) では、移動事象の時間的枠組みは必ずしも経路特性のみによって決まるのではないこと、また、経路の表現が文中の複数の位置に起こりうることを挙げ、「経路主要部表示型言語」対「経路主要部外表示型言語」という類型の再定式化が提唱されている。本稿でもこれに従う。

## 2.2 日本語の移動表現の特徴

日本語には「入る」や「上がる」などの経路動詞が存在し、それらを主動詞として用いて経路を表す。このため、一般的には経路主要部表示型言語（または動詞枠付け言語）に分類される（松本 1997, 2017b）が、経路が常に主要部で表示されるわけではない（Matsumoto 2018, 2020b）。日本語には、「歩いていく」「入ってくる」のように、テ形動詞が後続動詞と隣接して1つの述語を作るテ形複雑述語や、「駆け上がる」「通り過ぎる」のように、連用形動詞と後続動詞が結合した複合動詞のような形式もある。これらは、(3a, b) で見たように、頻繁に用いられる。言語類型を考える上で特に重要となるのは、「入ってくる」のようなダイクシス動詞が最終動詞（主要部）となるテ形複雑述語であり、この場合、主要部で表されるのは経路ではなくダイクシスとなる。このため、松本 (2017a) では、このようなテ形複雑述語の前項動詞（「入ってくる」における「入って」など）を準主要部と呼び、日本語のような言語を「経路準主要部表示型言語」として分類している。例えば、「部屋を出ていった」では「出る」に由来するヲ格名詞句が項となっているが、「出ていく」全体でも同じにヲ格名詞句が項となっていることから明らかのように、テ形複雑述語の前項動詞も主要部と同じ働きをする場合があることが知られている (Matsumoto 1996)。

この他、日本語では動詞以外にもさまざまな方法で経路を表出する。特に **TO, FROM** を表す場合は、動詞（主要部）ではなく後置詞（主要部外要素）である「に」「から」を使うことのほうが一般的である。

(5) 友達は {学校に／あっちに} 走っていった。

さらに、Talmy の一連の研究では、経路が文中に 1 か所で表されることを前提としているが、Sinha & Kuteva (1995) が指摘するように、同一文中で、同種の経路概念を重複して表出することもある。例えば、部屋や建物などの外側から中へ〈入る〉移動を表す場合、(6a) のように動詞「入る」のみで表すが、(6b) では「入る」に加えて、「中に」という位置名詞＋後置詞でも表している。

(6) a. 友達は部屋に入った。

b. 友達は部屋の中に入った。

これは、経路主要部表示型言語でも、主要部外要素で経路を表出することを示す例である。

ダイクシスに関しては、単純動詞で表されることもあるが、上述のとおり、テ形複雑述語で表されることが多く、いずれの場合もダイクシスが主要部となる。この点が日本語の重要な特徴であり、ダイクシスに関しては明らかに主要部表示型であるといえる（古賀 2017; 松本 2017a）。また、動詞以外に、「私のところに歩いてきた」「私のところから離れていった」における「私のところに」「私のところから」のような後置詞句でも表される。

様態は主動詞で表すことができるが、テ形複雑述語の前項（「歩いてくる」の「歩いて」）や複合動詞の前項（「駆け上がる」の「駆け」）や従属節（「スキップしながらこちらにやってくる」の「スキップしながら」や「歩いてこちらにやってくる」の「歩いて」）で表されることが多い。このうちテ形複雑述語の前項とテ形の従属節は形態的に同形

であるため区別が難しいが、本研究ではテ形の動詞と他の動詞との間に後置詞句など他の要素が入り込んでいる場合には従属節、そうでない場合にはテ形複雑述語の前項と分析している。

### 2.3 ハンガリー語の移動表現の特徴

ハンガリー語は経路を主要部外要素（動詞接頭辞、副詞、格接辞、後置詞など）で表し、類型論的に見て典型的な経路主要部外表示型言語である。目的語名詞（句）を取るか取らないかの違いで、主要部外要素の中でも、動詞接頭辞と副詞を動詞関連要素、格接辞と後置詞を名詞関連要素と呼ぶ。

経路動詞も存在するが、上下の移動や発着を表すものなどに限定されている（江口 2017: 50）。英語と同様に、主要部には (7a) のように移動の様態を表す動詞 (*fut* ‘run,’ *szökdécsel* ‘hop’ など) が使われることが多い。しかし、(7b) のようにダイクシス動詞 (*jön* ‘come,’ *megy* ‘go’ など) も現れる。

- (7) a. *Erika be-fut-ott*                      *a szobá-ba.*  
       Erica to.in-run-PST.3SG        the room-ILL  
       「エリカは部屋に駆け込んだ。」
- b. *Erika be-ment*                      *a szobá-ba.*  
       Erica to.in-go.PST.3SG        the room-ILL  
       「エリカは部屋に入っていた。」

英語の場合、文法的には *Erika went into the room* のような表現は可能だが、様態の違いに関わらず、眼前で起こっている出来事を表す場合は圧倒的に主要部で様態が表される傾向にある（秋田・松本・小原 2010; Matsumoto 2014）が、ハンガリー語の場合、歩く移動の表現では、(7b) のように様態は表出されず、主要部ではダイクシスを表す傾向が見られる（江口 2017）。



さらに、同一文中で、同種の経路概念を重複して表出することもある。例えば、部屋や建物などの外側から中へ〈入る〉移動を表す場合、(7a, b) で示したように、TO.IN を表す入格接辞 *-ba* を使うほか、TO.IN を意味する動詞接頭辞 *be-* を用いて表すこともできる。格接辞のみを使った (8) との違いは、動詞接頭辞をともなう (7a, b) では、部屋の中に入ったという解釈しかできないが、(8) では部屋の中に入っていなくてもよい点である (cf. 江口 2017: 62-63)。そのため、動詞接頭辞はアスペクト的な特性 (終結性) も担っていると考えられる。

- (8) *Erika a szobá-ba fut-ott.*  
 Erica the room-ILL run-PST.3SG  
 「エリカは部屋へと走った。」

ダイクシスに関しても同様に、同一文中で、同種の概念を重複して表出することができる。ハンガリー語のダイクシス表出手段は、動詞のほかに、動詞接頭辞、副詞、後置詞句または格接辞をともなう1人称代名詞がある。(9) のように 3 か所でダイクシスが表現される場合もあり、これはこの言語の特徴の1つである。

- (9) *Erika ide-jött hozzá-m a szobá-ba.*  
 Erica to.here-come.PST.3SG ALL-1SG the room-ILL  
 「(lit.) エリカはこちらへ私のところへ部屋へと来た。」

## 2.4 研究課題

以上のような前提をもとに、先行研究において、描写される事象が着点への到達を含むか否かによって、異なる移動表現の類型タイプが許される言語が存在することが主張されてきた。例えば、経路主要部表示型言語であるスペイン語において、着点への到達がない事象では、主要部動詞 (つまり、主動詞) として、(10a) のように様態動詞が使われる

が、着点への到達がある事象の場合には、(10b) のように経路動詞が使われるという Aske の指摘がある (Aske 1989)。

(10) a. *Juan caminó hasta la cima (?\* en dos horas).*  
 Juan walk.PST<sup>3</sup> up.to the top in two hours  
 “Juan walked up to the top.”

b. *Juan subió a/hasta la cima en dos horas.*  
 Juan go.PST to/up.to the top in two hours  
 “Juan went up to the top in two hours.” (Aske 1989: 7)

(10b) は「経路主要部表示型」の表現であるが、(10a) は「経路主要部外表示型」の表現であり、この事実は、類型に影響を及ぼしうるものである。

また、類型には関わらないが、経路主要部外表示型言語で、描写する事象が着点への到達を含むか否かによって経路表現の選択が異なる言語がある。その 1 つがハンガリー語である。着点への到達を含む事象の表現には動詞接頭辞が使われ、着点への到達を含まない事象の表現には使われない傾向にあることが、Eguchi & Bordilovskaya (2017) において、本研究と同じ映像を用いた実験調査におけるロシア語のデータとの比較により指摘されている。ロシア語にも同様に動詞接辞があるが、このような差異は観察されなかったというものである。

さらにこの研究を発展させたものとして、江口他 (2017) がある。ここでは、系統と類型の異なる 5 つの言語を対象とし、本研究と同じ映像を用いた実験調査を行い、描写する事象が着点への到達を含むか否かによって、言語表現にどのような差異が生じるのかを通言語的に考察している。5 つの言語のうち、「経路主要部表示型言語」に分類されるのがイタリア語と日本語で、「経路主要部外表示型言語」に分類されるのが英語、ロシア語、ハンガリー語である。調査の結果、いずれの言語

においても、着点への到達を含む事象か否かによって、表現の類型性が大きく変わる傾向は見られなかった。しかし、ハンガリー語においては、動詞接頭辞の使用頻度、後置詞および格の選択、主動詞のテンスの選択、というさまざまな側面で大きな違いが見られ、他の言語に比べて特に着点への到着を含むか否かを重視する傾向があることが明らかにされている。

そこで本稿では、2つの学習言語において、描写する事象が着点への到達を含むか否かが、経路表現形式（主動詞、接置詞、動詞接辞）および、主動詞のテンス・アスペクトの選択とどのように関わるのかについて考察する。移動事象のダイクシスによって異なる表現パターンが選ばれる言語があることが知られているため（松本 2017a）、異なるダイクシスを持った移動事象における表現を比較検討する。比較検討の方法として、まず、実験手法を用いて収集したデータに基づき、日本語母語話者のハンガリー語 (H-L2(j)) およびハンガリー語母語話者の日本語 (J-L2(h)) について母語話者データ、つまり日本語母語話者の日本語 (J-L1) およびハンガリー語母語話者のハンガリー語 (H-L1) と双方向に比較し、考察を行う<sup>3</sup>。双方向とは、1) それぞれの目標言語の母語話者のデータとの比較、2) それぞれの母語の母語話者データとの比較を意味する。1) によって目標言語の特徴による影響について、2) によって母語の影響について確認することができる。さらに、H-L2(j) と J-L2(h) の比較も行い、学習者言語に共通する特徴を明らかにする。本研究で比較する言語の関係について図3に示す。

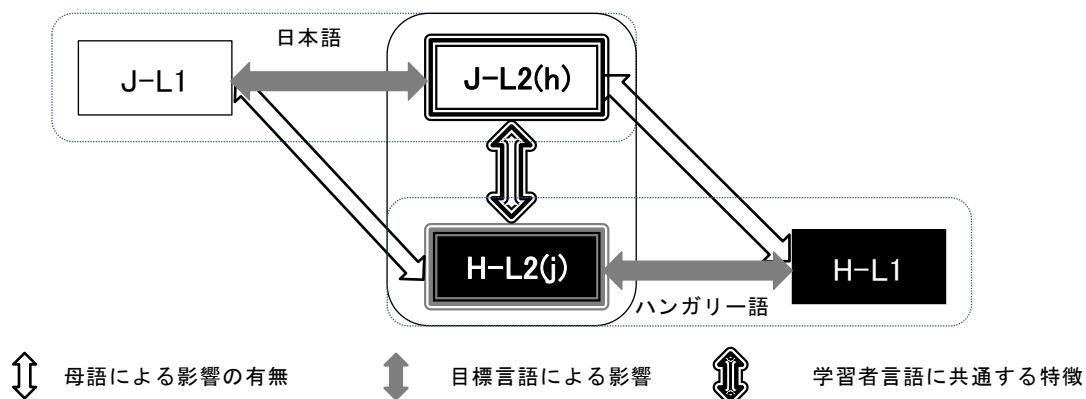


図 3. 本稿での言語比較

### 3. 調査方法

本研究の調査は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト『空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究』（研究代表者：松本曜）および『対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法：動詞の意味構造班』（研究代表者：窪菌晴夫、班長：松本曜）の一環として、プロジェクトで作成されたビデオ映像を用いて行われた。

#### 3.1 対象とする移動事象

本稿が報告する実験は、さまざまな移動事象のビデオ映像を提示し、実験参加者に口頭で描写してもらう産出実験であり、プロジェクト内で A 実験と呼んでいるものである。ビデオ映像は全部で 52 クリップであるが、本研究で分析の対象としたビデオ映像は、着点への到達の有無（TO, TOWARD；以降、それぞれ TO, TWRD と略す）と、3 種類のダイクシス（TOWARD THE SPEAKER, AWAY FROM THE SPEAKER, NEUTRAL；以降、それぞれ TWRD-S, AWYFRM-S, NEU と略す）を掛け合わせた 6 種類である。ダイクシスの |TWRD-S|, |AWYFRM-S|, |NEU| 場面は、それぞれカメラ位置に近づく動き、離れる動き、どちらでもない動き（前を横切る移動）の映像である。話者はカメラ位置にいる想定で映像を言語化するように指示された。経路は TO（自転車の位置への移動）、様態は WALK（〈歩く〉移動）に限定した。

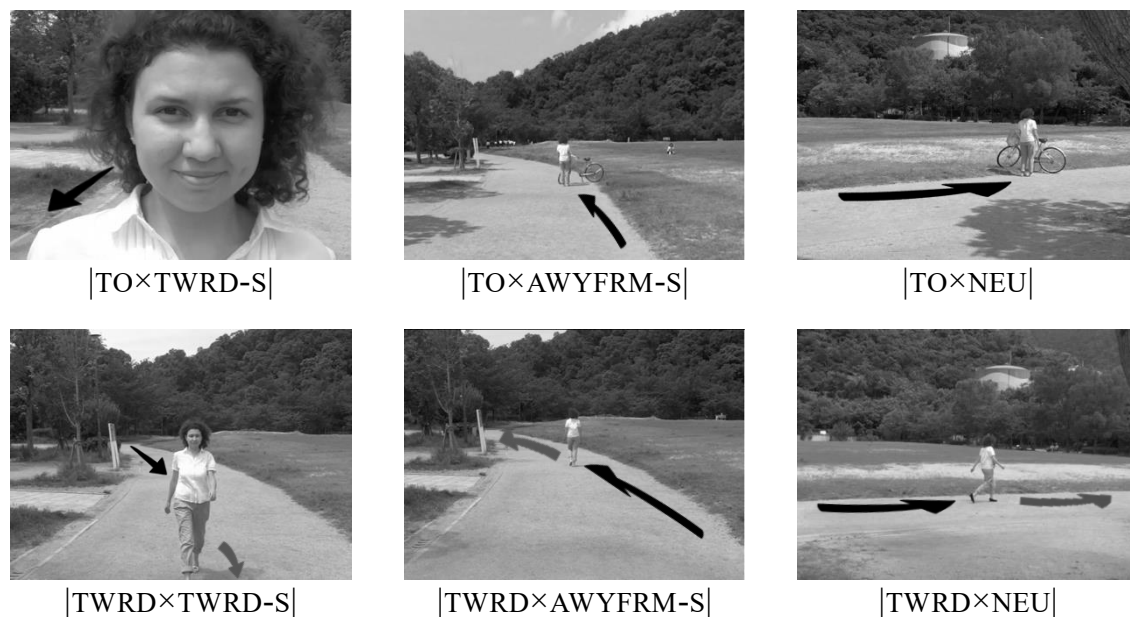


図4. 本稿で分析の対象としたビデオ映像

### 3.2 実験参加者

実験参加者は、日本語・ハンガリー語の母語話者と、それらの言語を第二言語として学ぶ学習者であり、主に、日本、およびハンガリーの大学生である。母語話者のデータは、プロジェクトの一環として得られた日本語（J-L1）、ハンガリー語（H-L1）のデータを使用している。学習者のデータは、日本語を母語とする中級ハンガリー語学習者（H-L2(j)話者）、ハンガリー語を母語とする中級の日本語学習者（J-L2(h)話者）によるもので、各言語の実験参加者の属性は、表1 のとおりである<sup>4</sup>。日本語母語ハンガリー語学習者は、日本の大学で専攻語としてハンガリー語を学ぶ、ハンガリー語学習歴 2 ～ 4年の大学生・大学院生であり、目標言語圏での滞在経験は 4名が 10か月、4名が 1か月であった。実験は日本の大学にて行われた。ハンガリー語母語日本語学習者は、ハンガリーの大学で日本語を専攻する大学生であり、日本語学習歴 2 ～ 9年の学習者であった。実験はハンガリーの大学にて行われた。なお、実験参加者の重複はない。つまり、母語話者として実験に参加した者が、学習者として学習言語で実験に参加した例は含まれていない。

表 1. 各言語の実験参加者とその属性

言語 話者属性		J-L1	H-L1	H-L2(j)	J-L2(h)
母語		日本語	ハンガリー語	日本語	ハンガリー語
回答言語		日本語	ハンガリー語	ハンガリー語	日本語
参加者数		22	15	15	18
性別	男性	10	6	6	3
	女性	12	9	9	15
年齢		20 代	平均 36.9 歳	20 代	20 代
言語能力		母語	母語	中級	中級

今回の実験参加者を一様に中級レベルの学習者と位置付けてはいるものの、学習背景や学習方法が異なる点、また、H-L2(j)話者、J-L2(h)話者ともに、高いレベルで少なくとも1つの外国語(=英語)を身につけており、いわゆる第三言語の学習者である点について、考察の際には注意が必要である。

### 3.3 実験および分析の方法

実験にはパーソナルコンピュータを使用し、実験手順の教示や例などは画面上に各言語で説明された。実験参加者には1場面ごとに、ビデオのシーンを実際に見ていると仮定して、見た内容について口頭で描写してもらい、発話はすべて録音された。

録音したデータは、各言語担当者1名が書き起こしを行った<sup>5</sup>。学習者データには、次のように誤用を含む文も存在するが、それらもそのまま書き起こされた。

- (11) a. \*A      *barátnő-m*                      *bicikli-nél*              *ment.*  
the    friend.F-POSS.1SG              bicycle-ADE              go.PST.3SG  
「(lit.) 友達は自転車のところで行った。」  
(H-L2(j), |TO×AWYFRM-S|)

b. \*友達は道で自転車まで歩きました。 (J-L2(h), |TO×NEU|)

書き起こした文は、設定した基準に従って、コーディングを行い、集計した。コーディングしたのは、産出された文中の各言語形式がどの移動事象概念を表しているのか、その形式はどのようなものか、そして文中での機能は何か、などである。例えば、(11) の各例は (12) のようにコーディングされた。

(12)

	言語表現	意味	意味細分類	形式	形式細分類	機能
a.	<i>a barátñő-m</i>	Figure	person	名詞句		主語
	<i>bicikli</i>	Ground	Goal	名詞句		斜格語
	<i>-nél</i>	Path	TO	格接辞		名詞関連要素
	<i>ment</i>	Deixis	thither	動詞	過去形	主要部

b.

友達は	Figure	person	名詞句		主語
道	Ground	rout	名詞句		斜格語
で	Location	AT	後置詞		名詞関連要素
自転車	Ground	Goal	名詞句		斜格語
まで	Path	up.to	後置詞		名詞関連要素
歩きました	Manner	WLK	動詞	過去形	主要部

次節で、この実験結果に基づく結果を示しつつ、考察を行う。

#### 4. 結果と考察：各言語における表現の特徴

##### 4.1 日本語とハンガリー語

2.4節で述べたように、本研究は、江口他 (2017) の結果に基づいているが、本稿執筆に当たり、日本語およびハンガリー語についてより詳細な分析を行ったため、両者を比較しつつ、改めてその結果を、ここにま

とめておきたい。それによって、日本語およびハンガリー語の着点への到達を含む事象と含まない事象の描写の特徴を明らかにする。

#### 4.1.1 各概念の表示頻度

まず、各概念の表示頻度を見てみよう。図5は、それぞれの概念が1クリップあたりで何回表出されたのかをグラフで表したものである。

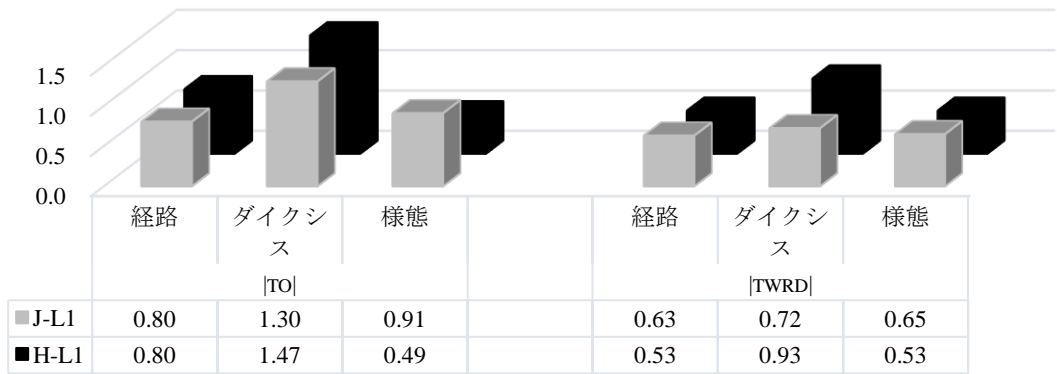


図 5.1 クリップあたりの移動事象概念の平均表示頻度（母語話者群）

ここでまず注意しておきたいのは、|TO| 場面と |TWRD| 場面とを単純に比較することができるのは様態のみであるという点である。|TO| 場面においては、|TWRD-S| 場面で「私」、|AWYFRM-S| 場面では「自転車」が着点になっているが、|TWRD| 場面においてはこれらの着点がないため、経路とダイクシスに関しては、単純に比較することができない。

その上で日本語とハンガリー語の言語間で比較すると、まず、|TO| 場面では、経路を表示する頻度は両言語間に差がない。ダイクシスを表示する頻度は、日本語に比べてハンガリー語のほうが高く、様態を表示する頻度は、ハンガリー語よりも日本語のほうが高い、という結果が観察された。日本語は経路主要部表示型言語であるため、主要部では経路もしくはダイクシスが、ハンガリー語は経路主要部外表示型言語であるため、主要部では様態が表されるとするタイプの予測に反する結果である。



|TWRD| 場面でも、ダイクシスを表示する頻度が日本語に比べてハンガリー語のほうが高いという傾向は同様であるが、経路と様態に関しては少し傾向が異なる。特に注目に値するのは、ハンガリー語の様態である。日本語では、|TO| 場面と |TWRD| 場面とを比較した際に、|TWRD| 場面のほうが表示頻度が低いが、ハンガリー語では |TWRD| 場面のほうが表示頻度が高い。

#### 4.1.2 主要部で表される概念

次に、主要部で表される概念について見てみると、図6のような結果となり、両言語ともに |TO| 場面と |TWRD| 場面とでは差は見られなかった。

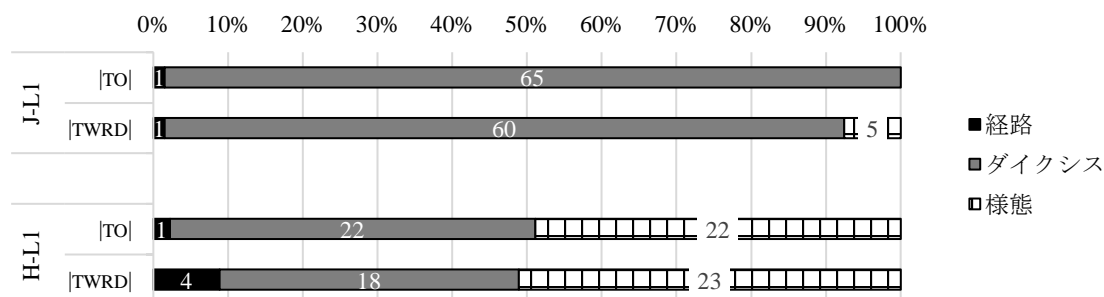


図 6. 主要部で表される概念（母語話者群）

日本語ではほぼすべての回答で、主要部においてダイクシス動詞「いく」「くる」が使われている。典型例を (13) に示す。

- (13) a. 友人がこちらに向かって歩いてきた。 (J-L1, |TO×TWRD-S|)  
 b. 友人が自転車のほうに歩いていった。 (J-L1, |TO×AWYFRM-S|)

|TRWD| 場面の5回答で様態動詞「歩く」が使われているが、|NEU| の場面で、いずれも (14) で示すような「ている」形での使用例である点は注目に値する。

(14) 友人が道を歩いている。

(J-L1, |TWRD×NEU|)

一方、ハンガリー語では、(15) で示すように、約半数の回答で、ダイクシス動詞 *jön* ‘come,’ *megy* ‘go’、半数弱の回答で様態動詞 *sétál* “walk,” *gyalogol* “walk” が使われている。

(15) a. *A barát-nő-m ide- {jött/ sétál-t} hozzá-m.*  
 the friend.F-POSS.1SG to.here- come.PST.3SG walk- PST.3SG ALL-1SG  
 「(lit.) 友人は私のところにこっちに {来た／歩いた}。」

(H-L1, |TO×TWRD-S|)

b. *A barát-nő-m oda- {ment/ sétál-t}*  
 the friend.F-POSS.1SG to.there- go.PST.3SG walk- PST.3SG  
*a bicikli-hez.*  
 the bicycle-ALL

(H-L1, |TO×AWYFRM-S|)

「(lit.) 友人は自転車のところにあっちに {行った／歩いた}。」

この他、|TWRD| 場面の4回答で、*közeledik* ‘approach’ などの経路動詞が使われている点は興味深い。

さらに、ダイクシス場面別に見てみるとより興味深い結果が得られた。ダイクシス場面別のグラフを図7に示す。

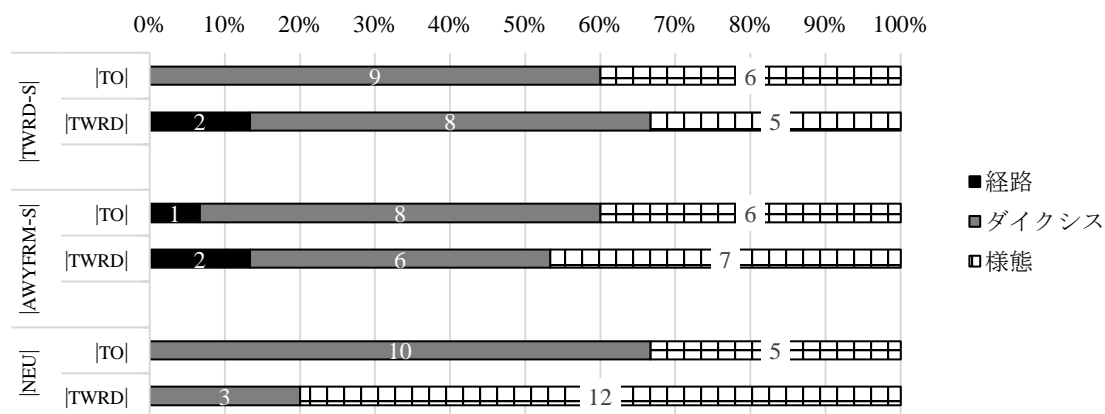


図7. 主要部で表される概念（ダイクシス場面別・H-L1）

|TWRD| 場面の結果について、2（主要部で表される概念）×3（ダイクシス場面）のカイ二乗検定を行うと、有意差が観察された ( $\chi^2 = 5.123$ ,  $df = 2$ ,  $p < .001$ ,  $Cramer's V = 0.354$ )。残差分析を行った結果、|NEU| 場面で、|TWRD-S| 場面および |AWYFRM-S| 場面に比べて、ダイクシスの表出が有意に少なく、様態の表出が有意に多いことがわかった ( $Radj = \pm 2.119$ ,  $p < .05$ )。|TO| 場面の結果についても同様にカイ二乗検定を行ったが、有意差は見られなかった ( $\chi^2 = 0.295$ ,  $df = 2$ ,  $p < .001$ ,  $Cramer's V = 0.082$ )。つまり、|NEU| 場面では主動詞としてダイクシス動詞ではなく、様態動詞が選択されていることが示唆される。

#### 4.1.3 各移動事象概念の表出手段

ここで、各移動事象概念がどのような表出手段で表示されたかについても確認する。

まず、図8 は、経路の表出手段について、それぞれの表示頻度とともに示したものである。

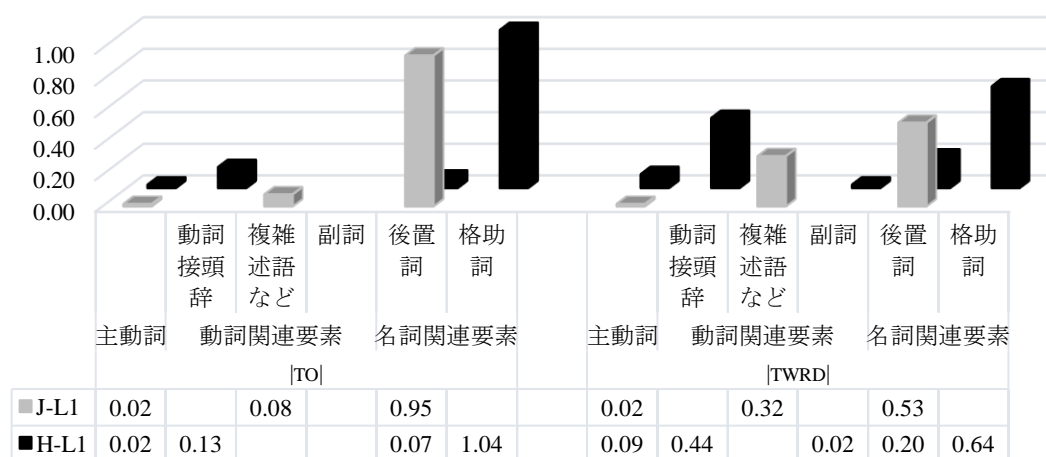


図 8. 経路表出手段別表示頻度（母語話者群）

両言語ともに |TO| 場面では、名詞関連要素である後置詞あるいは格助詞における表示頻度が突出しており、|TWRD| 場面では、動詞関連要素

である動詞接頭辞あるいは複雑述語などにおける表示頻度が |TO| 場面に比べて高くなっている点も共通している。まず、|TO| 場面で経路表出に用いられた名詞関連要素には、日本語では「自転車のところに」における「に」などの後置詞が、ハンガリー語では *bicikli-hez* (bicycle-ALL) における向格接辞 *-hez* が該当する。|TWRD| 場面で用いられた動詞関連要素は、いずれも |AWYFRM-S| 場面でその使用が多く見られた。(16) で示すように、日本語では「去っていった」における「去って」のようなテ形複雑述語の前項が、ハンガリー語では *el-megy* (away-go) における動詞接頭辞 *el-* が該当する。|AWYFRM-S| 場面では、移動の起点が事象の終結点と見なされることが示唆される。

- (16) a. 友人が歩いて去っていった。 (J-L1, |TWRD×AWYFRM-S|)  
 b. A *barátnő-m* *el-* {*ment/ sétál-t*} *től-em.*  
 the friend.F-POSS.1SG away- go.PST.3SG walk.PST.3SG DEL-1SG  
 「(lit.) 友人は私のところから離れた／歩いて離れた。」  
 (H-L1, |TWRD×AWYFRM-S |)

次に、図9 は、ダイクシスの表出手段について、それぞれの表示頻度とともに示したものである。

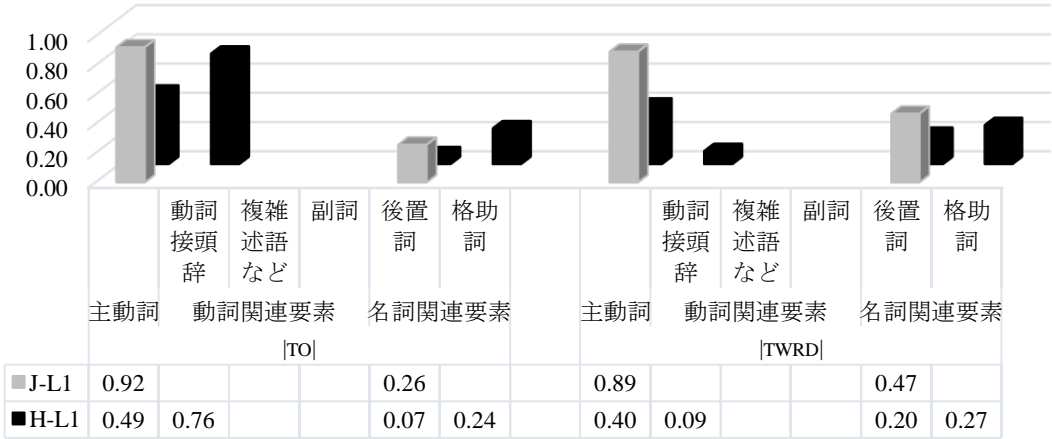


図 9. ダイクシス表出手段別表示頻度（母語話者群）

日本語について見てみると、ダイクシスの表出手段は主要部と後置詞句の2つであることがわかる。特に |TO| 場面では、図6 で見たように、1例を除くすべての回答において主要部にダイクシス動詞が使われていた。後置詞句は |TO| 場面、|TWRD| 場面を問わず、|TWRD-S| 場面で用いられた「私のところへ」などに加え、|TWRD×AWYFRM-S| 場面では「向こうへ」などが用いられたことから、|TO| 場面より|TWRD| 場面のほうが頻度が高い。

一方、ハンガリー語におけるダイクシスの表出手段は、主動詞、動詞接頭辞、副詞、後置詞句、名詞＋格助詞の計5つであることがわかる。主要部については、図6 で見た通り、半数弱の回答においてダイクシス動詞が使われていた。もっとも着目すべきは動詞接頭辞で、|TO| 場面では高い頻度で用いられているのに対し、|TWRD| 場面ではほとんど用いられておらず、動詞接頭辞の有無と事象の終結性の関係を裏付ける結果である。

名詞関連要素のうち、|TO| 場面と |TWRD| 場面とでは、同頻度で名詞＋格助詞が使用されているが、|TO| 場面で用いられているのは *hozzá-m* ‘ALL-1SG’ という1人称代名詞の向格形、|TWRD| 場面で用いられているのは *től-em* ‘DEL-1SG’ という1人称代名詞の離格形である。また、|TWRD| 場面では後置詞句が約半数の回答で使われているが、これは *felé-m* ‘TOWARD-1SG’ という1人称代名詞が「～のほうへ」を意味する後置詞をともなった形であり、|TO| 場面と |TWRD| 場面とで明確に使い分けがなされていることがわかる。とりわけ |TWRD-S| 場面で顕著な違いが見られた。|TO| 場面では、圧倒的に *hozzá-m* ‘ALL-1SG’ が 11回答で見られたのに対し、*felé-m* ‘toward-1SG’ は 3回答でのみ見られた。一方、|TWRD| 場面では *hozzá-m* は 4回答で見られたのみであったのに対し、*felé-m* は 10回答で見られた。(17) にそれぞれの典型例を示す。

- (17) a. *A barát-nő-m ide- jött hozzám.*  
 the friend.F-POSS.1SG to.here- come.PST.3SG ALL-1SG  
 「(lit.) 友人は私のところにこっちに来た。」

(H-L1, |TO×TWRD-S|)

b. A barát<sup>nő</sup>-m jön felé-m.  
the friend.F-POSS.1SG come. 3SG toward-1SG

「(lit.) 友人は私のほうに来ている。」 (H-L1, |TWRD×TWRD-S|)

このように、各概念の表出手段の分析から、ハンガリー語では |TO| 場面と |TWRD| 場面とを明確に区別して表現することが明らかとなった。

最後に様態について、ハンガリー語においては、表出はすべて主要部で行われていた。一方日本語においては、もっとも多かったのは「歩いてきた」における「歩いて」のようなテ形複雑述語の前項で、|TO| 場面では 55 回答、|TWRD| 場面では 44 回答で見られた。その他、図 6 で見たとおり、|TWRD| 場面では 5 回答で主要部において様態動詞が使われていたほか、「歩いて私のところにやってきた」の「歩いて」のような従属節での表出が |TO| 場面では 5 回答、|TWRD| 場面では 1 回答で見られた。

#### 4.1.4 テンス・アスペクト

最後に、表現に用いられたテンス・アスペクトの形式について考察する。

まず、表現に用いられたテンスについて、図 10 に示す。

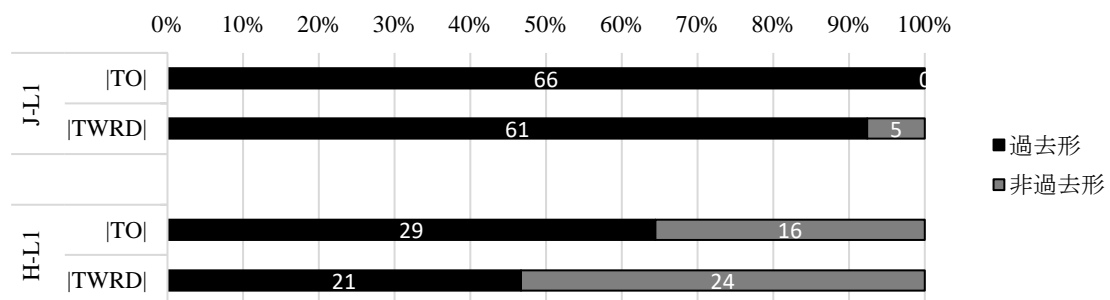


図 10. 各表現に用いられたテンス（母語話者群）

日本語ではほぼすべての回答で、主要部において過去形が使われている。|TWRD| 場面の 5 回答で非過去形が使われているのが、いずれも|NEU| の場面で「歩いている」という形で用いられたものである点は注目に値する。一方、ハンガリー語では過去形と非過去形の両方が用いられた。|TO| 場面と |TWRD| 場面の結果について、2 (テンス) × 2 (場面) のカイ二乗検定 (イエーツの補正) を行ったが、有意差は観察されなかった ( $\chi^2 = 2.205$ ,  $df = 1$ ,  $p < .001$ ,  $\phi = 0.157$ )。ただし、ダイクシス場面別では |TWRD-S| 場面で違いが見られた。

表 2. 表現に用いられたテンス (ダイクシス場面別・H-L1)

	TO		TWRD	
	過去形	非過去形	過去形	非過去形
TWRD-S	<b>11</b>	<b>4</b>	<b>4</b>	<b>11</b>
AWYFRM-S	10	5	11	4
NEU	8	7	6	9

同様に |TO| 場面と |TWRD| 場面の結果について、2 (テンス) × 2 (場面) のカイ二乗検定 (イエーツの補正) を行った ( $\chi^2 = 4.800$ ,  $df = 1$ ,  $p < .001$ ,  $\phi = 0.400$ ) ため、残差分析を行った。その結果、|TWRD| 場面で、|TO| 場面に比べて過去形の使用が有意に少なく、非過去形の使用が有意に多いことがわかった ( $R_{adj} = \pm 2.556$ ,  $p < .05$ )。

次にアスペクトに関して、ハンガリー語は既述のとおり、|TO| 場面と |TWRD| 場面と動詞接頭辞の使用と表される概念に違いが見られた。より詳しく見るために、ダイクシス場面別のグラフを図 11 に示す。

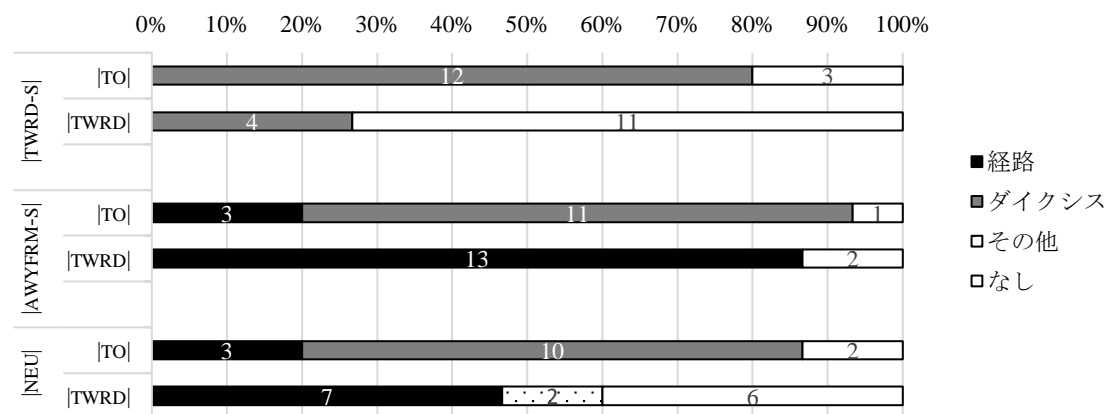


図 11. 動詞接頭辞で表される概念（ダイクシス場面別・H-L1）

|TO| 場面では、ダイクシス場面を問わず、(17a) のように、動詞接頭辞でダイクシスが表出される傾向が見られるのに対し、|TWRD| 場面ではダイクシス場面別で傾向が異なる。|TWRD-S| 場面では動詞接頭辞が使用されないことが多いが、|AWYFRM| 場面では動詞接頭辞で経路が表出される傾向が見られ、|NEU| 場面では (18) で示すように、その両方が約半数ずつ見られた。

(18) H-L1, |TWRD×NEU|

- a. A *barátnő-m*      a      *pályá-n*      *sétál.*  
the friend.F-POSS.1SG the field-SUP walk.3SG  
「友人はフィールドを歩いている。」
- b. A *barátnő-m*      *el-sétál-t*      *előtt-em*  
the friend.F-POSS.1SG away-walk-PST.3SG in.front-POSS.1SG  
a *pályá-n.*  
the field-SUP  
「(lit.) 友人はフィールドを私の前で歩き去った。」

また、4.1.3 節で述べたように、1 人称代名詞も、|TO| 場面と |TWRD| 場面とで明確に使い分けがなされている。



一方、日本語では、|TO| 場面と |TWRD| 場面で、「～のところへ」と「～のほうへ」のような使い分けは観察されなかった。また動詞のアスペクト形態にも大きな差は見られなかった。ただし、|TWRD| 場面で「ている」の使用が 6 回（|TWRD-S| 場面で 1 回、|NEU| 場面で 5 回）、「てしまう」の使用が 3 回（|AWYFRM-S| 場面で 3 回）観察された。これらは |TO| 場面でまったく見られなかった点で、若干の違いは観察された。

以上のように、日本語では、|TO| 場面と |TWRD| 場面とで大きな違いは見られなかったが、ダイクシス場面別に見てみると、テ形複雑述語の使用に違いが見られた。テ形複雑述語の前項で表される概念について、図 12 にまとめる。

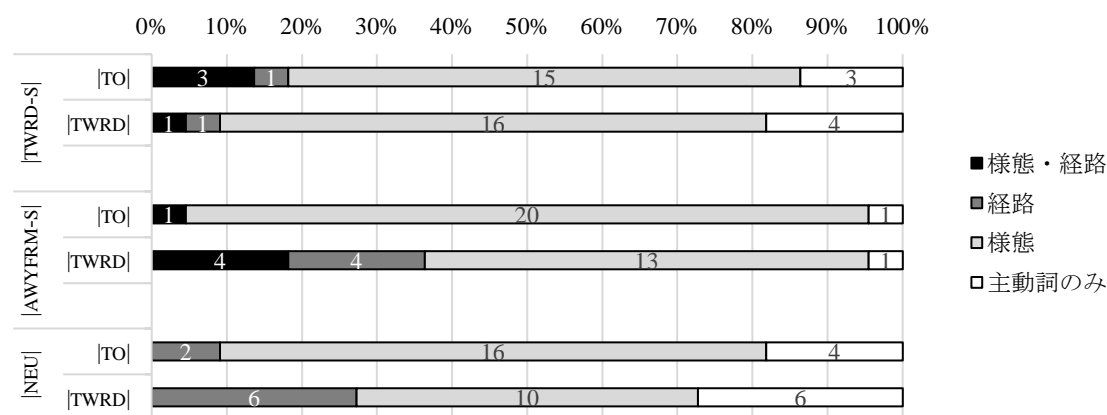


図 12. 複雑述語前項で表される概念（ダイクシス場面別・J-L1）

全体的に「歩いてくる」または「歩いていく」という様態＋ダイクシスという組み合わせが圧倒的に多いが、|AWYFRM-S| 場面と |NEU| 場面において、「去っていった」や「通り過ぎていった」のような表現による経路表出が、|TO| 場面に比べて、|TWRD| 場面で多いことがわかる。これはハンガリー語の動詞接頭辞で見られた傾向と類似する。つまり、類型を問わず、着点への到達を含まない事象を表現する際には、事象の開始点に着目し言語化される傾向が示唆される。

以上をまとめると、概ね表 3 のようになる。

表 3. |TO| 場面と |TWRD| 場面における表現パターン（母語話者群）

		主要部	複雑述語	動詞接頭辞	後置詞（句）・ （名詞＋）格接辞
日 本 語	TO	ダイクシス	様態	－	ダイクシス ／経路
	TWRD	ダイクシス	様態／ （経路）	－	ダイクシス
ハン ガ リ ー 語	TO	ダイクシス ／様態	－	ダイクシス	ダイクシス ／経路
	TWRD	ダイクシス ／様態	－	経路	ダイクシス

## 4.2 日本語学習者とハンガリー語学習者

本節では、ハンガリー語を母語とする日本語学習者の表現（J-L2(h)）と、日本語を母語とするハンガリー語学習者の表現（H-L2(j)）について、4.1節でまとめた、それぞれの母語話者の結果と比較しながら考察を行う。

### 4.2.1 各概念の表示頻度

まず、日本語回答話者群の各概念の表示頻度を図13に示す。

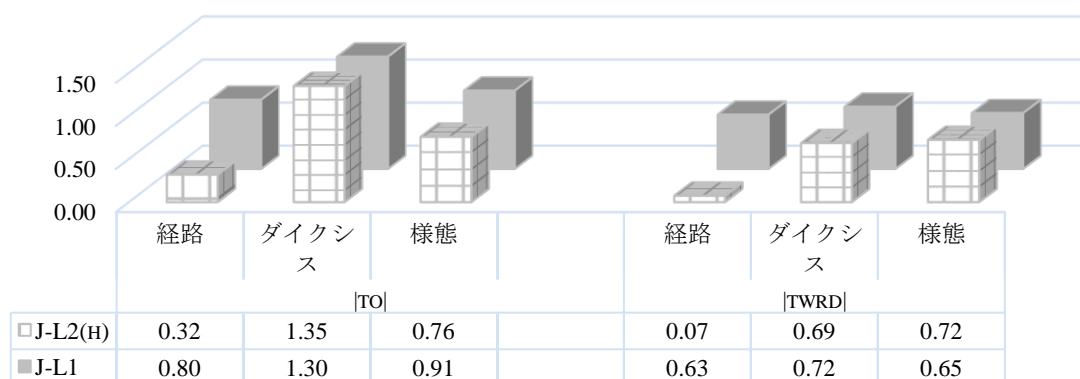


図 13.1 クリップあたりの移動事象概念の平均表示頻度  
（日本語回答話者群）

図 13 から、J-L2(h) は、J-L1 との比較において、|TO| 場面でも |TWRD| 場面でも、経路の平均表示頻度が極端に少ないことが見てとれる。ダイクシスについてはどちらの場面でもほぼ同程度の表示頻度である。様態に関しては、J-L1 では |TO| 場面と |TWRD| 場面の間で差が見られたのに対し、J-L2(h) では差が見られなかった。

次に、ハンガリー語回答話者群の各概念の表示頻度を図 14 に示す。

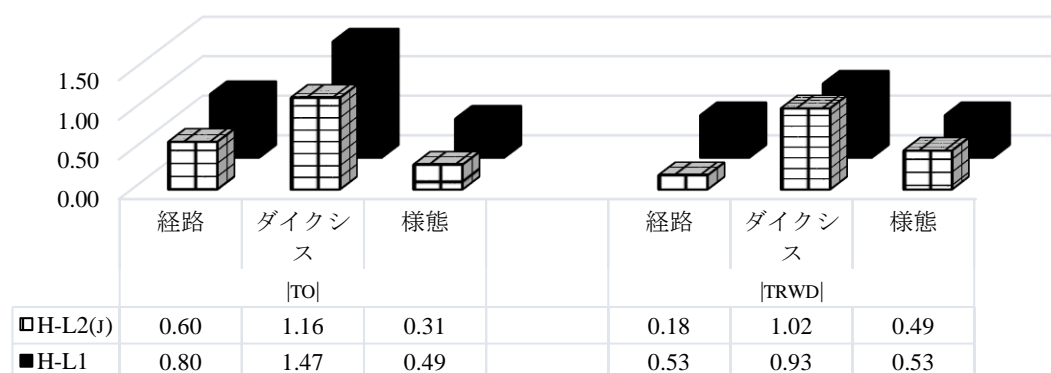


図 14. 1 クリップあたりの移動事象概念の平均表示頻度  
(ハンガリー語回答話者群)

図 14 から、H-L2(j) も、H-L1 との比較において、|TO| 場面でも |TWRD| 場面でも経路の平均表示頻度が低いことが見てとれる。ただし、J-L2(h) は両場面で大きな差が見られたのに対し、H-L2(j) では |TO| 場面では 1 クリップあたり 0.60 回の表出が見られ、H-L1 の 0.80 回と比べて、その差は比較的小さい。経路の表示頻度が母語話者に比べて低い点は J-L2(h) と共通する傾向であり、学習者言語に見られる特徴である可能性が示唆される。ダイクシスについては |TO| 場面で H-L1 に比べて表示頻度が低かったものの、1 を超えているということはすなわち、平均して 1 回以上はダイクシスを表出しているということがわかる。様態に関しては、H-L1 では |TO| 場面と |TWRD| 場面の間で差が見られなかったのに対し、H-L2(j) では |TO| 場面のほうが表示頻度が低いという傾

向が見られた。様態の表示頻度に場面間で差がある ( $|TO| < |TWRD|$ ) 点は、目標言語であるハンガリー語の特徴でも、母語である日本語の特徴でもないことから、別途考察が必要である。

#### 4.2.2 主要部で表される概念

次に、主要部で表される概念について、図 15、図 16 に示す。

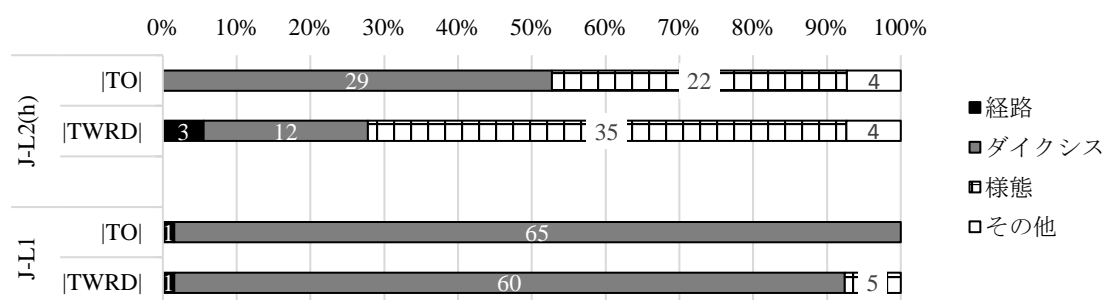


図 15. 主要部で表される概念（日本語回答話者群）

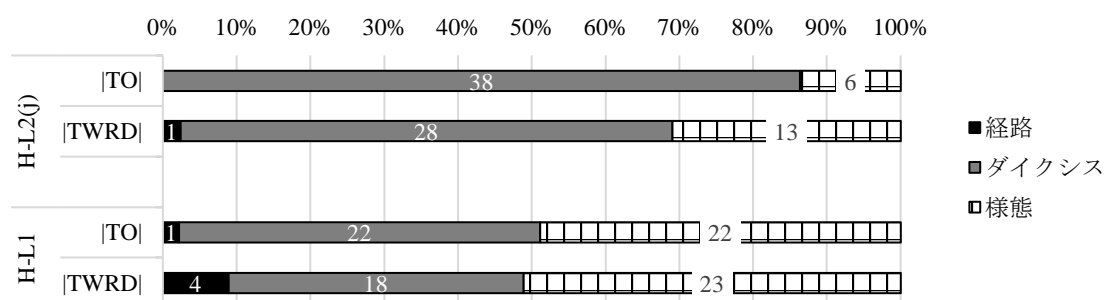


図 16. 主要部で表される概念（ハンガリー語回答話者群）

図 15、図 16 から、主要部で、J-L2(h) は J-L1 に比べて様態が表出される割合が高く、H-L2(j) は H-L1 に比べてダイクシスが表出される割合が高いことから、どちらの学習者言語も母語の影響が見られるといえる。様態とダイクシスの 2 つの表出割合の場面間の差について 2（様態 or ダイクシス）× 2（場面）のカイ二乗検定を行ったところ、いずれも有意差が観察された (J-L2(h):  $\chi^2 = 8.621$ ,  $df = 1$ ,  $p < .001$ ,  $\phi = 0.297$ , H-L2(j):  $\chi^2 = 3.020$ ,  $df = 1$ ,  $0.5 < p < .10$ ,  $\phi = 0.188$ )。残差分析を行った結果、

いずれも |TWRD| 場面でダイクシスの表出が有意に少なく、様態の表出が有意に多いことがわかった ((J-L2(h):  $R_{adj} = \pm 3.141$ ,  $p < .05$ , H-L2(j):  $R_{adj} = \pm 1.998$ ,  $p < .05$ )。母語話者群では場面間でこのような差異は見られなかったため、母語の影響ではなく、学習者言語に共通する特徴と考えられる。次節で各移動事象概念がどのような表出手段で表示されたかについて確認する。

#### 4.2.3 各移動事象概念の表出手段

まず、経路の表出手段についての結果を示す。図16 は、日本語回答話者群の経路表出手段について表示頻度とともに示したものである。

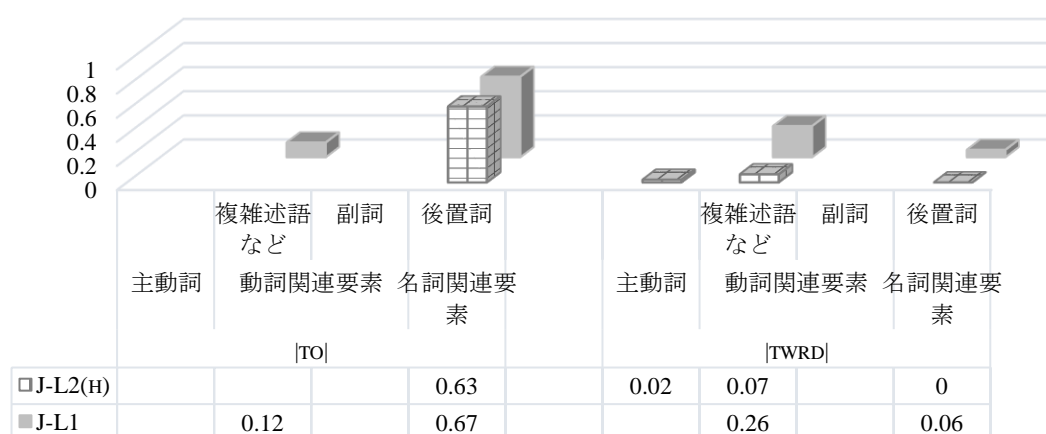


図16. 経路表出手段別表示頻度（日本語回答話者群）

J-L2(h) では、J-L1との比較において、経路の表出手段に関しては両場面ともにさほど大きな違いは見られない。ただし、複雑述語における表示頻度には両場面ともに違いが見られた。J-L1では「去っていった」における「去って」のようなテ形複雑述語の前項での経路表出が見られたのに対し、J-L2(h) ではそれが見られなかった。

図17 はハンガリー語回答話者群の経路表出手段について表示頻度とともに示したものである。

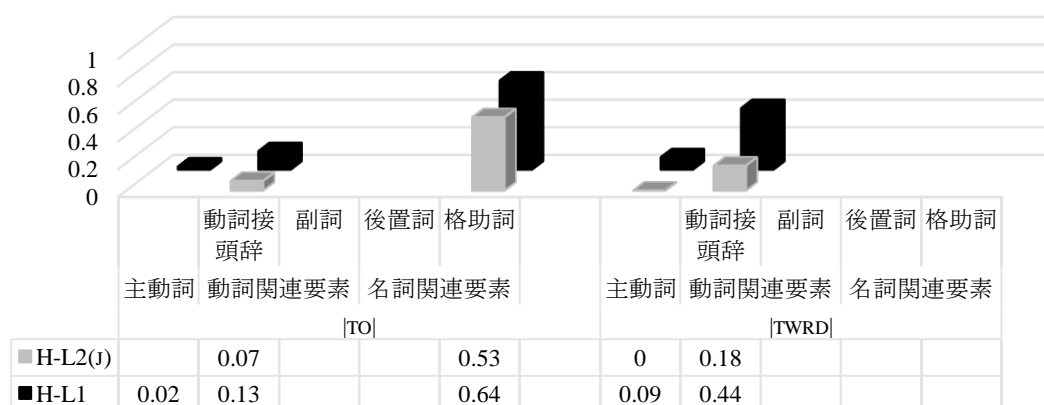


図17. 経路表出手段別表示頻度（ハンガリー語回答話者群）

H-L2(j) でも、H-L1との比較において、経路の表出手段に関しては両場面ともにさほど大きな違いは見られない。ただし、動詞接頭辞における表示頻度には両場面ともに違いが見られた。動詞接頭辞の使用に関しては 4.2.4節で詳述する。

次に、ダイクシスの表出手段についての結果を示す。図18 は、日本語回答話者群 のダイクシス表出手段について表示頻度とともに示したものである。

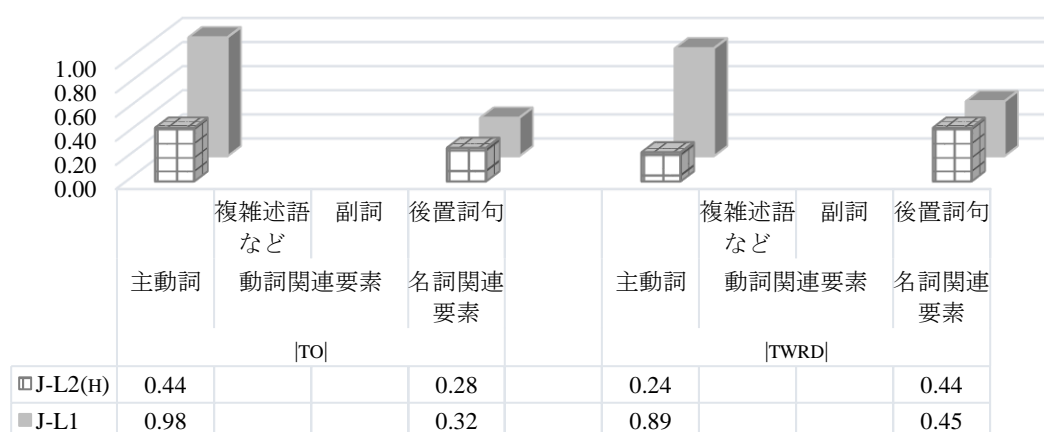


図 18. ダイクシス表出手段別表示頻度（日本語回答話者群）

J-L2(h) では、J-L1との比較において、ダイクシスの表出手段に関しても、両場面ともにさほど大きな違いは見られない。ただし、主動詞における表示頻度には両場面ともに違いが見られた。これについては、4.2.2 節で考察したとおり、J-L2(h) では J-L1 に比べて、主要部で様態が表出される割合が高いためである。

図19 はハンガリー語回答話者群のダイクシス表出手段について表示頻度とともに示したものである。

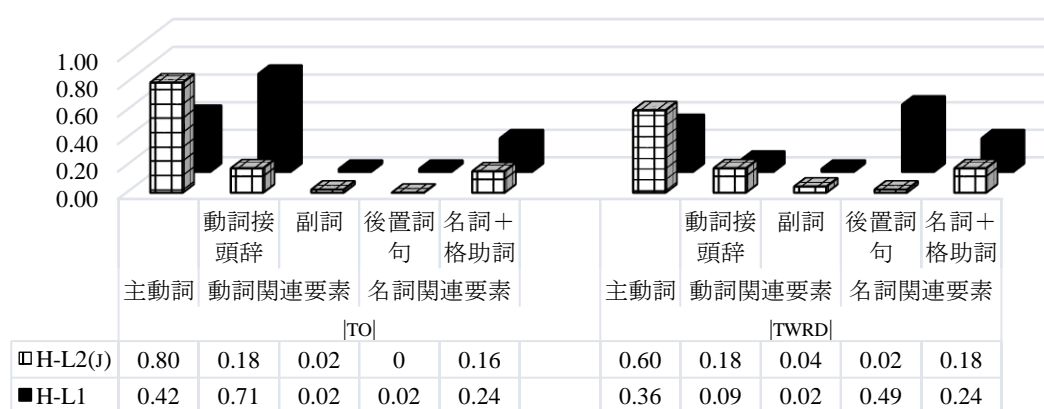


図19. ダイクシス表出手段別表示頻度（ハンガリー語回答話者群）

H-L2(j) では、ダイクシスに関しては、両場面ともに主要部での表出が圧倒的で、母語である日本語からの影響が見てとれる。また、|TO| 場面における動詞接頭辞の表示頻度には大きな違いが見られた。動詞接頭辞の使用に関しては 4.2.4 節で詳述する。また、H-L1では、|TWRD-S| 場面においては |TO| 場面と |TWRD| 場面とで、1 人称代名詞の使い分け (*hozzá-m* ‘ALL-1SG’ vs. *felé-m* ‘toward-1SG’) が見られたが、H-L2(j) では、*felé-m* は、わずか 1 回答で見られたのみで、両者の使い分けがなされていないことがわかる。

最後に様態表出については、両学習言語で、母語話者の回答と異なる手段での表現が見られた。J-L2(j) では |TO| 場面の 6 回答、|TWRD| 場面の1回答で見られたのみで、他はすべて主要部における表出であっ

た。J-L2(j) でもっとも多かったのが「歩いてきた」における「歩いて」のようなテ形複雑述語の前項であるのとは対照的な結果である。H-L2(h) は特に |TO| 場面において、主要部における表出が非常に少なく、わずか 6 回答 (13.3%) でしか見られなかった。|TWRD| 場面でも 16 回答 (35.5%) である。これについては、4.2.2 節で考察したとおり、H-L2(h) では H-L1 に比べて、主要部でダイクシスが表出される割合が高いことが要因となっている。非常に興味深い結果としては、H-L1 ではまったく見られなかった、主要部外要素での様態表出が 14 回答 (|TO| 場面の 8 回答、|TWRD| 場面の 6 回答) で見られたことである。うち 8 回答で、\*gyalog-va ‘walk-PRT’ という、様態動詞の分詞形（ただし誤用。正しくは gyalogol-va) が用いられており<sup>6</sup>、母語で多く見られる「歩いてくる」「歩いていく」からの影響だと考えられる。

#### 4.2.4 テンス・アスペクト

さらに、表現に用いられたテンス・アスペクトの形式について考察する。まず、テンスについて図 20 に示す。

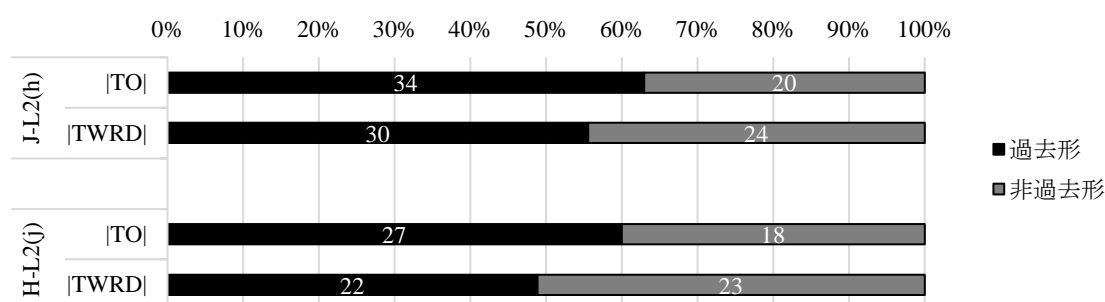


図 20. 各表現に用いられたテンス（学習者言語話者群）

4.1.4 節の図 10 で示したとおり、J-L1 ではほぼすべての回答で、主要部において過去形が使われているのに対し、J-L2(h) では |TO| 場面の 37.0%、|TWRD| 場面の 33.3% で非過去形の使用が見られた。H-L2(j) では H-L1 同様の傾向が見られた。場面間の差異について、学習言語ごとに、2 (テンス) × 2 (場面) のカイ二乗検定 (イエーツの補正) を行っ



たが、有意差は観察されなかった (J-L2(h):  $\chi^2 = 0.345$ ,  $df = 1$ ,  $p < .001$ ,  $\phi = 0.057$ , H-L2(j):  $\chi^2 = 0.717$ ,  $df = 1$ ,  $p < .001$ ,  $\phi = 0.089$ )。

次にアспектに関して、検討してみる。H-L1 では |TO| 場面と |TWRD| 場面とで動詞接頭辞の使用と表される概念に違いが見られたが、図 21 に示すように、H-L2(j)ではそのような差異は見られなかった。

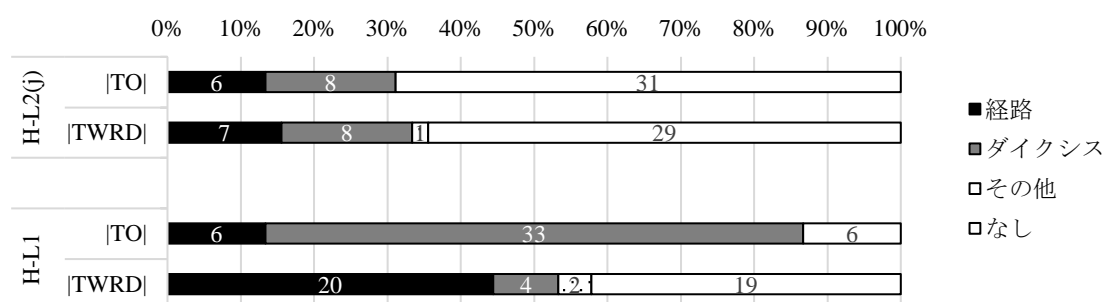


図 21. 動詞接頭辞で表される概念 (ハンガリー語回答話者群)

一方、J-L2(h) では、「ている」の使用が |TO| 場面の 5 回答、|TWRD| 場面の 12 回答で見られ、|TO| 場面と |TWRD| 場面とで若干の違いが観察された。J-L1 でも、|TWRD| 場面でのみ 7 回答で観察されたが、その結果と重なる傾向である。しかし、2 (「ている」の使用の有無)  $\times$  2 (場面) のカイ二乗検定 (イエーツの補正) を行ったが、有意差は観察されなかった ( $\chi^2 = 2.513$ ,  $df = 1$ ,  $p < .001$ ,  $\phi = 0.153$ )。また、J-L1 で若干の差異が見られた複雑述語については、場面間の差異を検討するほどの使用例が見られなかった。

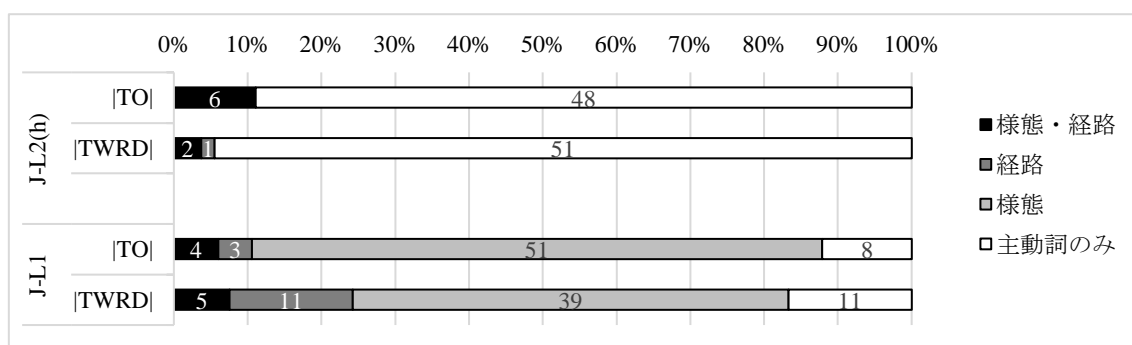


図 22. 複雑述語前項で表される概念 (日本語語回答話者群)

以上をまとめると、概ね表 4 のようになる。

表 4. |TO| 場面と |TWRD| 場面における表現パターン  
(学習言語話者群)

		主要部	複雑述語	動詞接頭辞	後置詞 (句) ・ (名詞+) 格接辞
J-L2(h)	TO	ダイクシス ／様態	(様態)	－	ダイクシス ／経路
	TWRD	ダイクシス ／様態		－	ダイクシス
H-L2(j)	TO	ダイクシス ／様態	－	(ダイクシス) ／ (経路)	ダイクシス ／経路
	TWRD	ダイクシス ／様態	－	(ダイクシス) ／ (経路)	ダイクシス

## 5. 総合的考察

以上、本研究では、日本語を母語とするハンガリー語学習者 (H-L2(j)) と、ハンガリー語を母語とする日本語学習者 (J-L2(h)) を対象とし、描写される移動事象に着点への到達が含まれるか否かによって言語表現に差異があるのか、あるのであればどのような表現形式によるものなのかについて考察した。

J-L2(h) と H-L2(j) との比較においては、両者を表現し分けない言語を母語とする者が、両者を表現し分ける言語を学習するパターンである H-L2(j) と、両者を表現し分ける言語を母語とする者が、両者を表現し分けない言語を学習するパターンである J-L2(h) との間に、習得の難しさという観点では顕著な違いは観察されなかった。つまり、着点への到達が含まれるか否かは、学習者の言語習得にはさほど大きな影響を及ぼさないことがわかった。ただし、いくつかの表現形式で、若干の差異は観察された。

考察の対象とした 2 つの場面間でもっとも顕著な差異が観察されたのは主要部においてである。まず、J-L2(h) は J-L1 に比べて様態が表出される割合が高く、H-L2(j) は H-L1 に比べてダイクシスが表出される割合が高かった。J-L1 はほぼすべての回答で、主要部ではダイクシスが表出されたのに対し、H-L1 では約半数で様態が表出されていた(4.1.2 節参照) ため、どちらの学習者言語も母語の影響が見られたといえる。その上で、両学習者言語とも、着点への到達が含まれない |TWRD| 場面でダイクシスの表出が有意に少なく、様態の表出が有意に多いことがわかった。これは、主要部で様態動詞が使われる傾向が見られたことによるものである。経路主要部表示型言語でも、着点への到達がない事象の描写には主要部で様態動詞が使われるという Aske (1989) の指摘と一部重なるものである。母語話者群では 2 場面間でこのような差異は見られなかったため、母語の影響ではなく、学習者言語に共通する特徴とも考えられるが、ダイクシス場面を考慮に入れて分析すると、|NEU| 場面では、H-L1 においては様態動詞が有意に多く観察された。また、J-L1 でも、一部に様態動詞の使用が見られたことから、母語話者の場合、描写する移動事象が着点への到達も含まず、ダイクシスの指定もない場合に、主要部で様態動詞を使用する選択が加わっている。一方、学習者の場合、母語話者よりも厳密にダイクシスを表現し分けており、どちらのダイクシスにも該当しない事象の描写に用いることのできる形式として、様態動詞を選択していると考えられる。このことから、学習者のほうが母語話者よりも意味概念と形式とを明確に対応させて言語化する傾向が示唆される。

また、J-L1 では、|TWRD| 場面におけるテ形複雑述語の前項の動詞選択で、Aske の主張に反して経路動詞の使用率が高くなる傾向が見られたが、J-L2(h) では、そもそも複雑述語の使用がほとんど見られず、このような差異は観察されなかった。H-L1 では、同様に複雑形式である動詞接頭辞の使用とその選択に大きな差異が見られたが、J-L2(h) では、動詞接頭辞の使用が少なく、このような差異も観察されなかった。日本語のテ形複雑述語の前項は経路と様態の表出に関わり、ハンガリー語

の動詞接頭辞は経路、ダイクシスに加え、アスペクトの表出にも関わる。複雑形式を使用していなかったということは、複雑形式を習得できておらず、これらの概念を表出していなかった、あるいは目標言語の母語話者とは異なる手段で表出していたということを意味する。

本研究から得られた知見の言語教育への応用という観点からは、両言語学習者が自らの表現を目標言語に近づけるためには、複雑形式の習得が不可欠であることがわかる。その際に、単に動詞と動詞、あるいは動詞接頭辞と動詞を組み合わせるという情報以外にも、母語話者が好む組み合わせが存在することも併せて習得する必要がある。また、中上級、上級の学習者データも収集、分析することで、習得のプロセスを明らかにすることが可能になるだろう。なお、本研究では実験に参加した学習者のレベルを厳密には統一できておらず、習得との関わりについて詳細に分析するには至っていない。これらを今後の課題としたい。

## 注

\* 本研究は、国立国語研究所共同研究『空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究（代表：松本曜）』、JSPS 科研費 15K02753, 16K02808, 15H03206 の助成を受けて行われている。また、実験におけるデータ収集に際して、エトヴェシュ・ロラーンド大学（ハンガリー）の内川かずみ先生にご協力いただいた。ここに記して謝意を表したい。

- 1 本稿例文中のグロスで使用する略号は以下のとおりである。なお、形態素境界をハイフン「-」で、同一形態素内に複数の文法要素が含まれる場合にはピリオド「.」で示す。ADE: adessive/ 接格、ALL: allative/ 向格、DEL: delative/ 離格、F: feminine/女性、ILL: illative/入格、POSS: possessive/ 所有、PST: past tense/過去、SG: singular/単数、SUP: superessive/ 上格
- 2 本稿では、「母語」という用語を、第一言語という意味でも用いる。厳密には、一部の中国在留邦人のように、幼児期に獲得した母語を喪失し、別の言語が第一言語となるケースもあるが、本稿ではこのような区別をせず、この 2 つを同義として扱う。また、学習者の用いる言語の体系を「学習者言語」と呼び、論文中では、「母語」を L1、「学習者言語」を L2 と表記する。

- 3 略称においては、最初のアルファベットが回答言語を、そして母語 (L1) か第二言語 (L2) かがその後につき、第二言語の場合はその話者の母語を ( ) 内に示す。
- 4 学習者のレベルについては、CEFR の基準からどちらの学習者群ともに B1 レベルと判断し、中級レベルと位置付けた。
- 5 対象とする各言語のデータ収集および分析担当者は、日本語母語話者の日本語 (J-L1 : 古賀・吉成)、ハンガリー語母語話者のハンガリー語 (H-L1 : 江口)、日本語母語話者のハンガリー語 (H-L2(j) : 江口)、ハンガリー語母語話者の日本語 (J-L2(h) : 江口・吉成・眞野) である。
- 6 正用の *Gyalogol-va* が 1 例もなく、*gyalog-va* という誤用が複数見られたのは、副詞 *gyalog* との混同が要因として考えられる。

## 参考文献

- 秋田喜美・松本曜・小原京子 (2010) 「移動表現の類型論における直示的経路表現と様態語彙レパートリー」『レキシコン・フォーラム』5、ひつじ書房、1-25。
- 江口清子 (2017) 「ハンガリー語の移動表現」松本曜 (編) 『移動表現の類型論』くろしお出版、39-64。
- 江口清子・吉成祐子・眞野美穂・アンナ、ボルジロフスカヤ・松本曜 (2017) 「移動表現における着点の有無：通言語的実験研究」『日本言語学会第 155 回大会予稿集』157-162。
- 古賀裕章 (2017) 「日英独露語の自律移動表現：対訳コーパスを用いた比較研究」松本曜 (編) 『移動表現の類型論』くろしお出版、303-336。
- 松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」中右実 (編) 『日英語比較選書 6: 空間と移動の表現』第 II 部、研究社、125-230。
- 松本曜 (2017a) 「移動表現の類型に関する課題」松本曜 (編) 『移動表現の類型論』くろしお出版、1-24。
- 松本 曜 (2017b) 「日本語における移動事象表現のタイプと経路の表現」松本曜 (編) 『移動表現の類型論』くろしお出版、247-274。

- Aske, Jon (1989) Path Predicates in English and Spanish: A Closer Look. In: *Proceedings of the Fifteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 1-14.
- Eguchi, K. and Anna Bordilovskaya (2017) A study of the functions of verbal prefixes in Russian and preverbs in Hungarian: An analysis of motion event description. [Paper presentation]. The 14<sup>th</sup> International Cognitive Linguistics Conference (11 July 2017), Tartu University, Estonia.
- Kiefer, Ferenc (1996) Az igeaspektus areális-tipológiai szempontból. *Magyar Nyelv* 92: 257-268.
- Kiefer, Ferenc (2000) *Jelentélmélet*. Budapest: Corvina.
- É. Kiss, Katalin (2002) *The Syntax of Hungarian*. Oxford: Oxford University Press.
- Matsumoto, Yo (1996) *Complex predicates in Japanese: A syntactic and semantic study of the notion 'word.'* Stanford, CA: CSLI Publications.
- Matsumoto, Yo (2003) Typologies of lexicalization patterns and event integration: Clarifications and reformulations. In: Shuji Chiba et al. (eds.), *Empirical and theoretical investigations into language: A festschrift for Masaru Kajita*. Tokyo: Kaitakusha, 403-418. [Reprinted in A. Goldberg (Ed.), *Cognitive linguistics (Critical concepts in linguistics)*, Vol. III. Routledge, 422-439, 2011.]
- Matsumoto, Yo (2014) Common tendencies in the descriptions of manner, path and cause across languages: A closer look at their subcategories. [Paper presentation]. Langacross 2 (21 June 2014), France: Lilly.
- Matsumoto, Yo (2018) Motion event descriptions in Japanese: Typological perspectives. In: P. Pardeshi & T. Kageyama (eds.), *Handbook of Japanese contrastive linguistics*. Berlin: De Gruyter Mouton, 273-289.
- Matsumoto Yo (2020b) Motion verbs in Japanese. In: *Oxford research encyclopedia of linguistics*. Oxford: Oxford University Press. (DOI: 10.1093/acrefore/9780199384655.013.295)
- Sinha, Chris, and Tania Kuteva (1995) Distributed spatial semantics. *Nordic Journal of Linguistics*, 18, 167-199.

- Talmy, Leonard (1985) Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In: Timothy Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description, Vol.3: Grammatical categories and the lexicon* (pp. 57-149). Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard (1991) Path to realization. *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 17, Berkeley Linguistics Society, 480-519.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a cognitive semantics*. MA: MIT Press.